

浄

monthly
JŌDO

土
11

November 2009



法然上人鑽仰会



上人のたまわく、
われ、首を切らるゝとも、
このこと云わずば
あるべからず

(御流罪のとき西阿弥陀仏との問答)



呉丘 富塚善吉・友禅模様師『浄土』2009年表紙の人

明治33年神田区松下町に生まれる。

日本画の小林呉橋に師事。

淀橋区落合に工房を構え多数の弟子を持つ。

戦時中、千葉興津に疎開、戦後も潮風の漂う仕事場で友禅を描き続ける。

昭和52年逝去。

表紙は構図から下絵、糸目糊置、色挿し、仕上げ、金加工まで全工程を一人で行った逸品。

11月号『白鷺』

浄土

2009/11月号 目次

法然上人のお念仏（第2回）.....	阿満利麿	2
連載小説 快僧渡辺海旭	前田和男	10
響流十方	林田康順	22
朝めし礼賛⑧	麻生タオ	26
会いたい人 柄本明さん②	関 容子	28
江戸を歩く 第三十一回	森 清鑑	36
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会
主催
講演会

法然上人の
お念仏
第2回

法然上人の お念仏

阿満利磨

第二回



お坊さんたちの間では「対機説法」と言われております。仏教では、この「人」ごとに、その人に応じて教えるということとは尊いんだというご説明をなさいます。しかし、私が見るところ、こういうふうには法然上人がさまざまな説き方をされたというその根拠というのは、実は、念仏というのは「阿弥陀仏の行為である」ということを、庶民によくよく了解してもらいたいからだと思うのです。

私どもは念仏をします。念仏をいたしますが、それは同時に阿弥陀仏が私の中で働いている姿であるのです。「念仏というのは、阿弥陀仏が私の中で働いてくださっている姿である」。これがわからないと、法然上人の念仏はわからないのです。

例えてみますと、法然上人の念仏はダイヤでつくった装飾品であります。つまり、ダイヤの装飾品、装飾品というのは身につけたい人の希望で指輪になったり、ネックレスになったり、同じ指輪でもこういう形にしてほしいとか、こういうプレスレットにしてほしいとか、それはそれを身につける人の希望によっていろいろな形が要求されるでしょう。

しかし、ダイヤであることには変わりがない。本質はダイヤなんです。だから、自由に加工しても、人々は安心してそれを身につけるのです。

ですから、法然上人がさまざまな説かれ方をした根本は、念仏というものは、阿弥陀仏の行為である。阿弥陀仏の働きである。つまり、念仏というものには、「私が念仏をする」という一面と、「阿弥陀仏が私の中で働いておられる姿が念仏だ」という二重の意味があるのです。これはとても大事な点です。

そういうことがあるからこそ、例の阿波の介の念仏と源空の念仏のいずれが勝っているかといった、ああいうお話が残るようになるのです。

阿波の介というのは、今で言えば占いを職業としている人であったようですが、ご存じ

のとおり、たくさんの美女をそばに侍らせて、しかも、彼女たちを痛めつけて、今で言えばSなのか、Mなのか、その上大酒飲みであったというどえらい変態性欲性を持った悪人です。

そういう変態性欲者で、悪人であった阿波の介が法然上人のお弟子になった。法然上人は、そういう阿波の介を大変かわいがられたわけです。この阿波の介の法然上人を慕う気持ちが非常に純粹だったんでしょ。それでいつもこの阿波の介を身近に置いておられたのです。彼も法然上人を慕って、常に給仕をしていたと言われております。

ある日、聖光房弁長さんに、法然上人は「阿波の介の念仏と源空（私）の念仏のどちらが勝っているか」という問いを投げかけられたのです。でも、弁長さんは答えをわかっておられたのです。わかってはいたけれども、この際、お師匠様がどのように言われるか、その言葉を直に聞いて後に残したいと思われたので、「師匠の念仏と比べると阿波の介の念仏は、とてもではありませんが及ばない」と、「師匠の念仏には及ばない」とわざと間違えて答えたんです。

そうすると、法然上人は顔色を変えられて、語気を荒げて、「一体、あなたは日頃から私の話のどこを聞いていたのか」と、「阿波の介も「仏、助けたまえ」と念じて念仏を申しているではないか。私も「仏、助けたまえ」と念じて念仏をしている。どこに違いがあるのか」と答えられたわけです。それを聞いて、聖光房は涙を流して喜んだ。「自分の思っていたとおりの答えだった」という話があるんですね。

それから、『歎異抄』の中にもこんな話があります。ちよつと余談ですが、『歎異抄』という、どうも皆さん方は真宗の書物だと思っておられる節があります。おかしい話です。どうも浄土宗の人は余り『歎異抄』を読まないようです。

『歎異抄』は法然上人の語録なんです。法然上人の語録をそのまま親鸞が自分の弟子の唯円に伝えているのです。

例えば、「悪人正機」という言葉があります。「善人なおもて往生す、いわんや悪人をや」というのは、最近の学者たちは、みんな「親鸞独自の言葉だ」などと言って喜んでくれるけれども、あれは法然上人の言葉です。

そして、「念仏には無義をもつて義とす」という。つまり、歎異抄、つまり、異端が起こつてくるそのもとであると。「念仏には無義をもつて義とす」というのは、これは法然上人が親鸞に散々教えたことなのです。

そういう法然上人から教えられた一番大事な言葉を親鸞聖人が唯円に語って聞かせた。それが『歎異抄』というものです。

ですから、『歎異抄』というのは、法然さんを大事に思われる方にはぜひお読みになっていたいただきたい。あの中で親鸞が真宗で、法然上人が浄土宗だなんて、そんな区別はどこにもないのです。そういう区別にとらわれている限りは、法然上人の念仏はわかりません。

ちよつと余談になりましたが、その『歎異抄』の中で「親鸞が自分の信心も、師匠である法然上人の信心も一つである」と言ったところ、法然上人の周りにいた高弟方が「そんなはずはない」と、「善信（親鸞）、あなたの言う信心と法然上人の信心が一緒だなんて、それはおこがましい話ではないか」と。

そこで親鸞が「法然上人の学識とか見識とか、そういうものと比べて自分が自分の学識や見識が師匠の法然上人と同じだと言え、それは間違いである。しかし、私が言っていることは、私の信心と法然上人の信心は同じだということを申しているのであって、そのことについては間違いない」と。

ところが、ほかのお弟子さんたちはなかなか納得されずに、ついに法然上人の前でこの問題の決着をつけようということになって、それで法然上人の前で話をした。これに法然上人は、「善信の信心も如来より賜りたし信心である」と。つまり、親鸞の信心も如来から賜っている信心である。「私、源空（法然）の信心も如来より賜りたる信心である。されば、それはただ人となり。もしも、別の信心だとあなた方が言うのであれば、皆さん方は源空がまいる浄土へお越しになることはあるまい」と答えられたという話が『歎異抄』に載っております。

このように阿波の介の念仏も自分の念仏も同じだと、親鸞の信心も私の信心も同じだと言いつつ切れたということは、念仏が阿弥陀仏の行為であるからこそです。

ついでに、「信心」と「念仏」の関係ですが、これは非常に簡単であって、阿弥陀仏の「我が名を称えよ」という、そういう念仏を信じるのが信心なんです。「信心」というのは念仏を信じることです。それ以外に信心は何もありません。

ですから、「浄土宗は念仏という行を尊び、真宗は信心を尊ぶ」というのは、うそっぱちです。そんなことは何も関係がない。「念仏を信じる」ことが信心であります。

ですから、このように法然上人は念仏、あるいは信心が阿弥陀仏の行為であると。念仏というのは阿弥陀の行為であるということ、よくよくわきまえておられた。だから、このようないろいろな説き方ができたのです。

私はそういう「念仏」の持っている二重性といいますが、これを思い起こすわけです。特にこの「阿弥陀仏が私の中で働いてくださっている姿が念仏だ」という一面を繰り返し、繰り返し確認をするということは大事なことです。

もう一つ、『歎異抄』のことで申しておけば、例の唯円という弟子が、この親鸞聖人に

向かって、「念仏をしても、念仏をしても、喜びの心が一向にわいてこない。念仏をしても、念仏をしても、早く極楽浄土に生みたいという気も起こってこない。これは一体どうしたのか」ということを聞く一節がありますね。そうすると、親鸞は、「唯円、おまえもそうか。私もそうなんだ」と言われたのです。

従来解説書では、親鸞も昔はそうだったと。だけど、今はもうそういう気持ちはないというふうに解釈しているのです。しかし、ちゃんと読めば、八十幾つの親鸞は、「今でもお念仏をしても喜びの心がわかないこともあるし、早く浄土に往きたいという気持ちにもなれない。そういう気持ちは今も持っている」というふうには書いてあるのです。

それで唯円はまた感動するのですが、唯円だけではなくて、私たちも感動するわけです。八十近い、あるいは八十を超えていたかもしれない親鸞が、念仏をしても喜びの心がわかないことがあると言っているんです。早く浄土へ往きたいという気持ちが起こらんとやっているのです。

しかし、おもしろいのは、その後、親鸞は唯円に対して「それは私たちの煩惱が深いからそうさせるのだ。私たちの煩惱が深いからこの世に対する執着が強くて、早くこの世からおさらばして、早くあの世に往きたいなという気持ちになれないからだ」ということを言っておられるのです。

これは余談ですが、私の母は九十幾つで亡くなっているのですが、亡くなる寸前まで病院で口をもぐもぐ、もぐもぐしているんですね。いつ行っても口をもぐもぐ、もぐもぐ動かし続けている。

それで、母にそういうことをしているのはなぜかと聞いたたら、これはこの病氣というの

は、ものを食べるときにこういう運動をしていないと、ここの筋肉が弱って、ものがおいしく食べられなくなるから、こうして時間があればばくばく、ばくばくしていると。もうあしたの命もわからん人間ですよ。そうすると、母は言いました。「人は死ぬと言ってもなかなか死ぬるものではない。生きたい、生きたいという気持ちばかりだ」ということを言っていました。

親鸞は唯円に対して、そういう煩惱の深いのが人間である、そういう煩惱の深い人間であるから、そんな簡単に浄土に往きたいなどという気持ちにはなれないと。念仏をしても、念仏をしても喜びの心がわかないというのは、我々の煩惱が深いからである、ということ説いたのです。

しかし、煩惱が深いということは、それはもう既に阿弥陀仏に救われているという証拠だとも言っています。なぜならば、阿弥陀仏は煩惱の深い凡夫のために本願を起こされたのであるからだ。だから、「煩惱が深い」ということこそ救われている証拠だと言っているのです。一見、逆説ですね。大変な逆説のような話をして、それに唯円は納得したのです。

ですから、「ありがたい、ありがたい」、「早く浄土に往きたい」と言う人は、それは煩惱がない人が言っているのではないか。煩惱のない人に阿弥陀仏の教えは必要ありません。このように『歎異抄』の第九章で親鸞が唯円に語ったことは、念仏の持っている「阿弥陀仏の行為である」という点から発言をしているんです。念仏を称える人間の立場だけから考えると、いろんな不安感を持っているのは当たり前であります。

いろいろな不信も生まれてくるでしょう。しかし、念仏はそういう我々凡夫の行為であると同時に阿弥陀仏が働いてくださっているのです。だから、阿弥陀仏から見れば、私た

ちがどんなにじたばたしていても、「南無阿弥陀仏」と称えた人間をもう救っておられるのです。

そのことをもつと信頼してもいいのでしょうか。もつとそのことを信じていく。そうすれば、よく言われますお念仏をしても、何かもう一つすっきりしない。もつとはつきりさせたい。念仏をして、もう「こうだ」と言い切りたいんだから」とおっしゃる方は決して少なくありません。

それは、しかし、先ほどの唯円の質問ではありませんが、己の煩惱について思いが足りない。反面、そういう煩惱を具足した凡夫のために阿弥陀仏が工夫してくださったのが念仏だということです。

ですから、私たちが念仏をするということは、阿弥陀仏が私の中で働いてくださっているんだということを見失っているから、そういう心配事が生じてくるんだと思います。

私は法然上人の念仏の特徴は、その念仏の二重性だと思うわけです。念仏を決断して選んで、称えるのは紛れもない私であるけれども、その念仏というものは阿弥陀仏が「我が名を呼べ」と私たち頼んでいることです。「我が名を呼んでくれたら、いかなる人間でも救う」と言っておられるのですが、「我が名を呼ぶ」というのは、阿弥陀さんにとって大事な行なのです。

ですから、阿弥陀さんは阿弥陀さんの行を私どもの「念仏」という形で実践しておられるのでありますから、自分の念仏を、自分だけの念仏という意味ではなくて、阿弥陀仏が働いておられるという一面を時には思い起こしてみること、とても大事なことがあると思います。

(つづく)

阿満利庵(あま・としまろ)

明治学院大学名誉教授(2006年4月から)

仏教雑誌「連続無窮」主宰

『法然の衝撃』『法然を読む』著者

近著「歎異抄—注解・現代語訳・解説」(ちくま学芸文庫)(2009年5月刊行)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九回

今井正との縁^{えにし}
ふたたび その2



野球、映画・芝居、 喫茶店はご法度の芝中

ラジオドラマは佳境にはいり、教育者・渡辺海旭の偉業を紹介しはじめた。

「幾多の大学、中学校の校長に推されましたが、殊に芝中学校の校長としては前後二十二年間つとめ、多くの子弟を育成し、或いは自分の俸給を投げ出してまで数多の秀才を養育し……」

今井正は、父親と海旭とを重ねあわせながら、海旭を校長に戴いた芝中時代の回想にふけた。

今井が父親への反撥をつのらせていったのは、芝中へ通うようになってからだ。それは、いつしか海旭と芝の校風への鬱屈とないまぜになっていった。そもそも芝を選んだのは今井ではない。父の薦めによるものだ。長男である今井にいずれは寺を継がせたい。

そのために父は僧侶の師弟が多い芝中に入れたのだろう。今井は芝に入った当初からそう思いこんでおり、すでに自分の「未来」を封じられたようで、それが我慢ならなかった。

多感な今井少年にとって、芝中生活は「僧門の修行道場」に思えた。登校時の遅刻取り締まりにはじまる規律の厳しさだけではない。なにしろ、野球、映画と芝居はご法度。喫茶店も父兄同伴でなければ許してもらえない。これに反撥する生徒も少なからずいて、野球道具を芝公園の一隅に隠しておいて、下校してから仲間で興じたり、あえて「ご法度」をおかして映画や芝居へ、あるいは銀座の資生堂パーラーへくりだす「不良」どももいた。

今井には、海旭がそうした「抑圧」の後ろ盾に思え、それが父親の無言の圧力とも重なって、海旭は偉いけれども煙たい存在に感じられた。

不良や悪童とは一線を画して同調すること

はなかった今井だったが、ただひとつ「ご法度」をおかしたのは映画だった。学校のそば

の愛宕下には「愛宕キネマ」があったが、野球場の観客席のように長いすを並べただけの三番館で、映画好きの芝中生はそこを敬遠して、中学生の小遣いでもなんとかなるとともにセカンドランの神田の「南明座」か芝園橋の「芝園館」に通った。今井の「行きつけ」は通学途中にある芝園館だった。ここで銀幕のスターが演じるドラマに感情移入しながら、つかの間、鬱屈を忘れることができた。しかし映画はいっぱうで今井の自由の翼を羽ばたかせ、抹香くさい寺など継ぎたくないという思いを駆り立てられ、しかし長男の自分にそれが許されるのかとさらに悩みが深まるのだった。

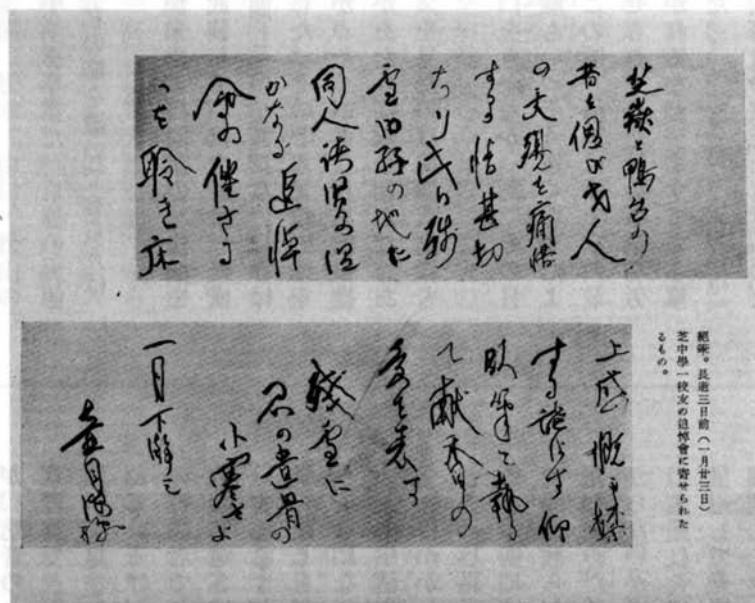
寺を継ぐのはいやだが、その確たる理屈がみつからない。それも今井少年を苛立たせる一因だった。「いやなものはいや」では子ど

もがだだをこねているようで、我ながら納得がいかなかった。

「寺は継がない」と父親に宣言

そんなとき、おそらく中学二年か三年か、今井は一冊の書物に出あって、激しい衝撃をうけた。それは松岡譲の『法城を護る人々』という三巻におよぶ長編小説だった。松岡も「お寺の子」で、既成仏教のありかたに疑問を感じ、その腐敗堕落を問いただすなかで、ついに寺を出て行くという筋立てである。一気呵成に読み終えた今井は、自分が幼少時から見てきた現世宗教の内実を見事にえぐりだして、これで父親の跡は継がない」と心にきめたのだった。

その回天的衝撃の日から半年ほどたったころだろうか、一家で夕餉をとっていると、箸をおいた父の口からこんな言葉が出て出



た。

「正もあと二年で中学を卒業だ。京都の大徳寺へ修行にいったら、私の跡を継いでもらえば、楽隠居ができる」

ついに来るものが来た。松岡譲の『法城を護る人々』で理論武装していた今井は、既成仏教批判を全面展開して、「ぜったいに寺は継がない」と宣言した。そのとき父親の怒りようは尋常ではなかった。いきなり茶碗を投げつけられ、飯粒があたりに散りとんだ。あんなに荒れ狂った父を見たのは後にも先にもはじめてだった。

十日ほど父とは口をきかなかった。その日以来、海旭との距離もいっそう遠くなったように感じられた。この頃、海旭は浄土宗の最上位・勸学に任ぜられ、また社会事業功労者として宮中に招かれるなど、ますます「偉い人」になっていた。

海旭から週に一回修身の授業をうけるのだ

が、吃音の上に早口ときてくるから、さっぱり理解できない。それをいいことに、自分の理解不足を棚にあげて、「こ難しい理屈をこねているけど、所詮は親父と同じく既成宗教の擁護者でしかない」と腹の中でつぶやいて、敬して遠ざけるばかりだった。

ますます芝中生活は鬱屈したものになり、早く芝とも父親の寺ともおさらばしたいと思うようになった。

芝中生活もあと一年となったとき、今井は生死にかかわる大病に襲われた。中学二年のときに盲腸炎にかかったのだが生来病弱なため、手術には耐えられないという医者診断で薬で散らして抑えていた。それが急に暴れだしたのだ。今井は経緯が経緯だけにもう助からないかもしれないと観念、だったら今生の名残に大好きな映画を見ておこうと思い、早退して芝園館へ飛び込んだ。ところが痛みが激しくなって映画を見るとどこではなくな

り、這うように帰宅するとそのまま病院へ。全身麻酔の手術でなんとか命を得たが、今から思うと、将来映画を商売にするべく運命づけられていたのだろうか。

芝中の先輩のオルグで 共産党の非法活動へ

昭和四年、芝中を卒業した今井は、上級の旧制水戸高校へ進んだ。一高（現東大教養学部）は自信がなかったし、仮に合格しても東京に留まることになる。とにかく父親と実家の寺から決別したかった。もうひとつは厳格な芝中とは異なる自由闊達な校風で学びたかった。そこで選んだのが水戸高校だった。大正時代中葉、原内閣は高等教育を拡充するために、それまでの一高（現東大教養部）から八高（現名古屋大教養部）までのナンバースクールに加えて、所在地の名を冠した高校を増設。大正八年に新潟、松本、山口、松山の

四高等学校、その翌年の大正九年に、山形、佐賀、弘前、松江とともに創立されたのが水戸高校である。五回卒業の宇都宮徳馬によると、「地元北関東の秀才と東京の半不良中学生の混成」で、校風は自由闊達で学生運動もさかん。三回生には作家の舟橋聖一がおり、今井は五回生。卒業生の多くは、今井も舟橋もそうだが、東京帝大に進み、有為な人材を輩出した。

父親の呪縛からの決別と自由の気風にふれた今井は、当時の才気あふれる学生がそうであつたように、左翼運動にかぶれ、警察の厄介になる。因縁というべきか、今井が左翼に感化されるには、渡辺海旭が校長をつとめる芝中がからんでいた。今井の芝中時代はいわゆる大正デモクラシーの只中であつた。当時マルクス主義は危ないがゆえに魅力的なハイカラな新思想で、どこかモダンな響きをもっていた。だから芝のませた生徒のなかには、

マルクスを得意げに口にする連中がいた。今井もひそかに憧れをもっていたが、マルクス主義へ傾倒するのは水戸高校へ進学してからだ。水戸市内の書店で、高畠素之の『マルクス十二講』をみつけ、寮で読んでいたときだった。今井が所属するバスケット部のマネージャーの宮原誠一が入ってきた。宮原は芝の二年先輩で、今井は知らなかったが、実は共産党の非合法組織のリーダーだった。

「もつと面白えのを貸してやろう」

といって翌日宮原から渡されたのは雑誌「戦旗」。宮原がすすめたのは、小林多喜二という初めて聞く作家の「蟹工船」という小説だった。読み始めるなり、一気に引き込まれた。そして、今井は一ヶ月もすると共産党サークルの熱心な活動家になっていた。

今井は一年たらずで十五人ほどの新人メンバーをオルグしたところで、上級生の主要メンバーともども検挙され、宮原とともに一年

の停学処分をうけた。そして、父親とともに検事に呼び出され、説諭をくらったが、若気のいたりというか、ふんぞりかえって、検事を「資本家の犬め」とばかり睨み返した。いっぽう涙をながしている父親をみて「息子の俺は正義をしているのに、なんと情けない父親だ。これで父親に勝った」と奇妙な高ぶりを覚えたものだった。それは、海旭を校長に戴く芝中時代の鬱屈を乗り越えられたという高揚感でもあったかもしれない。

父親とともに 海旭が身近な存在に

しかし、あれから戦争をはさんで二十年ちかくなったって、自分は間違っていたと思うようになった。父親に勝ったなどと思下したあのときの自分が情けなく見えてきた。その思いをつよくしたのは、最近父親をたずねたときに、ぼつとこう洩らされて驚かされたからだ。

「この間の選挙で、野坂参三に入れたよ」

野坂参三とは日本共産党のリーダーのあの野坂である。戦後直後の一九四六（昭和二十一年）年に亡命先の中国から帰国するや、進駐軍を「解放軍」と規定、また「愛される共産党」をキャッチフレーズに、同党大躍進の旗振り役となった。親戚筋に聞いたところだと、父親は戦後合法化された共産党に投票し続けていたらしい。

「寺を継がない」と逆らった息子に茶碗を投げつけた父。共産党にかぶれて検挙された息子に対する検事の説諭に涙した父。その父が息子と共産党にひどい目にあわされたのに野坂参三と共産党に投票しつづけたとは……。

今井は、勝ったつもりが、父親にやられたとすら思った。これで父との長い誤解がとけ、ようやく和解できたと思った。

ついこのあいだ、父との間にこんな衝撃的な出来事があったものだから、ラジオドラマ

を聞きながら、父と海旭をかさねているうちに、父と同じく海旭とも長い誤解がとけ和解ができるのではないかとも思った。

今井は、はるか昔、海旭の評価をめぐって、芝の卒業生仲間で議論を戦わせたことを思いだした。言い出しつべは今井を左翼に引つ張り込んだ宮原だったろうか。ラジオドラマでも紹介されていたが、海旭がアジア進出を主張する頭山満ら極右民族主義者と親交が深いことを口をきわめて批判した。これに対して、後輩の誰かが「海旭は左翼の庇護者」と弁護した。海旭に庇護されたのは塚本善隆。今井より十歳以上も年上の中国仏教史の第一人者で今井も名前は知っていた。たしか戦後は京大の印度哲学の教授になったはずだ。塚本は学生運動に関係し、海旭が住職をつとめる西光寺で庇護されていたというのだ。もし海旭が手をさしのべていなかったら当代随一の「東方学」の碩学とその偉大な業績はなかっ

西
光
寺
墓
所



故人が平素居住せられし書齋（終焉の室）

たかもしれないと。さらに別の後輩は芝在学中のこんなエピソードを紹介した。ある生徒がちよっとした出来心から校内のパン屋のパンをくすねた。これが発覚して校長の海旭に呼び出された。退学を覚悟したが、海旭は、反省しきりの生徒を赦し、出来心とはいえ私の指導の至らなさと自らを責めたというのである。

このとき今井は、マルクス主義に入れあげていたこともあって、海旭のふるまいを所詮はプロの宗教家の処世だと一顧だにしながら、今にして思うと、なんたる思いあがりだと汗顔のいたりだった。今井は二十年ぶりに考えを改めた。父親同様、海旭にも「やられた」と。すると、これまで偉くて遠い存在だった海旭が、にわかに人間くさい身近な存在に感じられてきたのだった。

いよいよラジオドラマは大団円を迎え、海旭は流感で急逝。後に芝中正門脇に建てられ

た胸像には「渡辺先生は永久に生きているという意味から没年が記されていない」という語りで、全編の終わりとなった。

今井が芝在学中は海旭は存命だったので、胸像ができたのは卒業後のことだ。しかしその胸像も戦況悪化のなかで、供出を余儀なくされ、砲弾になったと聞いていた。今井も兵隊にとられたが、海旭も胸像になって出征したのかと思うと、海旭が身近な「戦友」にすら思えてきた。

ところで、と今井はつぶやいた。

——もし海旭が生き延びていたら、戦後の民主選挙で、いったいどの誰に投票していただろうか。ひよっとしたら父のように、共産党の野坂参三か。まさか、それはないだろう。今井は苦笑しながら、そんな想像をさせるぐらい海旭が身近になったぶん、海旭の存在がますますつかみどころがなく、大きくふくらんでくるのを覚えた。今井は、二箱めの煙草

古き伝統技
三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1128
振替00180245231

から一本ぬいてくわえると、マッチで火をつけた。今日も五箱百本はこえそうだ。今井は肺の奥深く煙を吸い込んで、深いためいきをついた。

——いったい渡辺海旭とはどんな人物だったのだろうか……
(今井正の項おわり)

●前田和男 プロフィール

1947年東京生まれ。渡辺海旭が校長をつとめた芝中・芝高60期。東京大学農学部卒。翻訳家、ノンフィクション作家、編集者。路上観察学会事務局。資生堂化粧文化研究会会員。著作：『MG5物語』（求龍堂）『足元の革命』（新潮新書）など。

訳書：I・ベルイマン『ある結婚の風景』（ヘラルド出版）など。

念仏して往生するに不足なしといひて、悪業をものはばからず、行すべき慈悲をも行ぜず、念仏をものはばまざらん事は、仏教のおきてに相違するなり。

(法然上人「念仏往生義」)

「お念仏さえ称えれば往生に不足はない」などと言つては、悪事さえもはばからず、なすべき慈悲の行を実践もせず、ましてお念仏に励まないようでは、仏教の定めに反するといふものです。

仏弟子として

他力本願。自分自身の弱さ、いたらなさを自覚した上で、お念仏を称えて、阿弥陀さまが私たちをお救いくださると誓われたご本願のお力にわが身をゆだねる、という意味をもつ言葉です。決して、私たち自身がなすべき努力もせず、人に様の力をあてにする、という意味ではありません。先日、新聞紙面に、まさにそんな間違った「他力本願」を地でいくような生活をする複数の男性の姿を嘆いた、なんとも悲しく、寂しい読者投稿を目にしました。

「生活保護談義」に耳を疑う

高知市 自営業 藤田優子 三七

「生活保護の面接のときは、同じ服を着ていった方がいいよ」。停留所でバスを待っていると、耳を疑うような会話が聞こえてきた。振り返ると、四〇歳前後の健康そうな三人の男性だ。「仕事をしたくても、体調が悪く働けないと言った方が早く金がもらえる」とのアドバイスもあった。その後、三人は携帯電話の出会い系サイトや焼き肉店の話題で盛り上がっていた。

本紙に連載されていた「二〇三〇年」の中で、生活保護費の支給日を「給料日」と呼ぶ家庭の話が載っていた。そうした親の背中を見て育った子供は、夢や希望を持ってなくなっていくという。生活保護費は楽をしてぜいたくをするためのお金ではない。まして、もとをただせば税金ではないか。

やがて、バスが到着したが、彼らと同じバスに乗る気がせず、私は家路に足を向けた。五歳の娘には、私の背中がどう映っているのかを考えながら。

（産経新聞 二〇〇九年八月二二日号）

いかがでしょうか。昨今「あなたが本当にやりたい仕事をすればいいのよ」などという、一見、寛容で優しい物言いが幅をきかせ、自身がなすべき努力をはじめから放棄し、挙げ句の果てには、辛さや苦しさに堪え忍ぶ姿をかつこ悪いなどとさげすむ風潮があるようです。これでは、それこそ生涯を賭すことができる、真にやりがいのある仕事など見つけれようはずありません。

仏教は、一人一人の忍耐（にんぢん）や努力（しゆじん）を尊びます。もちろん、他力本願の教えを説かれた法然上人も、日々、自身が「行ずべき慈悲」を実践すべく、忍耐を重ね、努力に励まれた方であることは言うまでもありません。そんな法然上人だからこそ、上人の一言一言が重みを持ち、人々の心に響いたのです。冒頭のご法語は、次のように続きます。

たとえば、父母は慈悲の心で良い子も悪い子も同様に育みますが、良い子のことは喜び、悪い子のことは嘆き悲しむようなものです。同じように、仏さまはあらゆる人々を哀れみ、善い人も悪い人も仏の世界へ導き渡してくださいま

すが、善人を見ては喜び、悪人を見ては悲しまれるのです。いわば、肥沃な土地に良い種を蒔けば良い作物が実るようなものです。是非とも善人となるよう心がけてお念仏を称えなさい。こうした人を「真に仏教に従う者」というのである。（『念仏往生義』）

私たちは精一杯の愛情を込めてわが子を育てます。「頑張っているなあ」と思える子も、「何をやっているんだ!」と叱り飛ばさざるを得ない子も共に愛しいわが子です。それと同じように阿弥陀さまも、どんなに悪いことを犯してしまっても、心からそれを懺悔し、まことの心でお念仏を称える私たちのことを必ず救ってくださいます。しかし、間違っても、こうした阿弥陀さまの大きな慈悲の上にあぐらをかいて、悪びれず、開き直った生活を送ることは決して許されるものではありません。なかなか満足にはできないけれど、お念仏を称えつつ、忍耐を重ね、努力に励んで、世のため人のために心がけた日暮らしを送ることが大切なのです。こうした日暮らしを送れる方こそ、多くのみ仏の心に沿った「真に仏教に従う者」であり、ひいては、最期臨終の夕べに阿弥陀さまが迎えに来て下さった時、「あなたのできる範囲でよく頑張ったなあ!」とお誉めの言葉をかけていただける方でありましょう。

合掌

（林田康順）

朝めしの友「納豆」はミステリアス

「朝めしの友」から何か一品をと考えて、納豆にしました。そう、あの独特の臭いとネバネバした糸を引くあれです。というのも、納豆は実に不思議な食べ物だからです。

日本に納豆と呼ばれるものには二つあります。

一つは京都の大徳寺納豆のような糸を引かない「塩（辛）納豆」。もう一つは私たちが普通納豆といっている「糸引き納豆」です。どちらも大豆の発酵食品であるところは同じですが製法が違い、塩納豆は塩と麹で発酵させる（有塩発酵）のに、糸引きは稲ワラに存在する納豆菌（納豆をつくるから）だけによって発酵（無塩発酵）させることで、あの臭いとネバネバ質をつくり出します。

塩納豆は別名「寺納豆」ともいい、これは中国に留学した僧たちが精進のタンパク源として製法を持ち帰り、主に寺院でつくられたからで、つまり出自がある程度わかっています。納豆という名前も寺の台所を「納所」といい、そこから出たものだから、というのが一つの定説になっています。ところが糸引き納豆についてはその出自がちっ

とも明らかでないのです。煮大豆と稲ワラがあればできるのだから、コメと大豆が伝来した縄文末期にはすでに近いものがあったという自然発生説もありますが、納豆文化は東日本のもので、西日本では近年まであまり食べませんでした。

そこで生まれるのは「伝説」です。もともと有名なのは関東以北に残る平安後期の武将、八幡太郎源義家のそれです。義家は朝廷の命により二度奥州平定に赴きますが、どちらかで兵糧攻めに遭う。当時の軍馬の飼料はワラで編んだ俵に入れた煮大豆（ワラも餌）で、馬の腹に括りつけて運んだのですが、食べ物がないのでしようがないと俵を開いたら、馬の腹で温められた大豆が糸を引いていた。こわごわ口にしたらけっこうイケて、以降兵糧食になった——というものです。食文化研究家の永山久夫さんは、義家の奥州平定の帰途、秋田を起点に関東→中部→京へ至る道筋に納豆の名産地が数多くあり、いずれも義家伝説が残っているということから、この道を「ナットウロード」と名付けていますが、これなら東日本の食文化で

あることはわかります。

例外が一つ。それは西日本では多くの故郷である九州・熊本だけに納豆文化があることで、これも地元では領主であった加藤清正が豊臣秀吉の朝鮮出兵の折りに……あとはほとんど義家伝説と同じ……という伝説があるのですが、義家の時代より後のことであり、すでに兵糧食としてあった納豆を持ち込んだのではないか、と思っています。

もう一つ。大豆を無塩発酵させる納豆に似た食品は東アジアに広くあるそうです。そこで、そうした地域を線で囲ってみると、中国・雲南あたりを真ん中に日本、インドネシア、ブラタンが三角形に結ばれ、文化人類学ではこれを「納豆群の大三角地帯」(別名ナットウ・トライアングル)と呼ぶのだそうです。しかし、かき混ぜて糸を引かせ、めしにかけて食うというのは日本独特のようなのです。つまり、糸引き納豆の出自がはっきりしない、糸を引かせてめしにかけて食うというのは日本独特——ほくが納豆を「不思議な食べ物」というのはそこなのです。

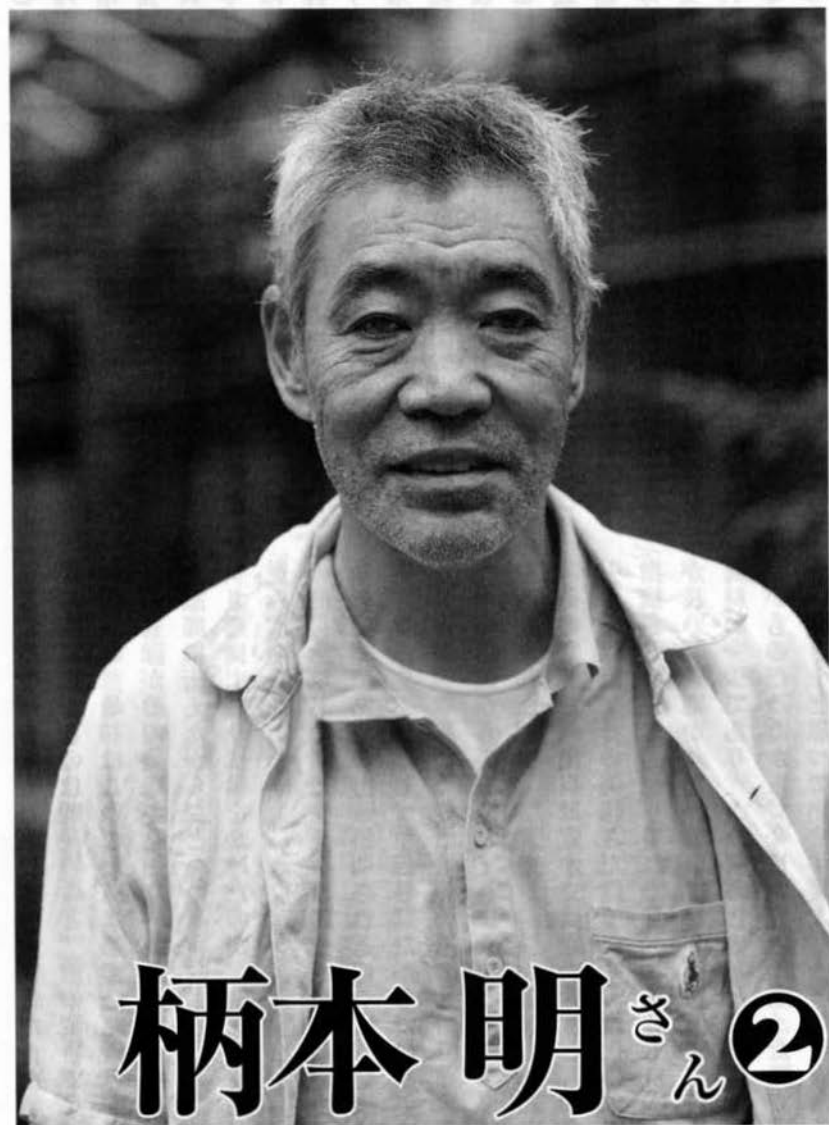
ところで、もともと東日本の食文化だった納豆が全国に広がるのは戦後のこと。前の戦争で兵食に出され、最初はこわごわ口にしていた西日本出身の兵隊がその美味さを知り、戦争が終わったあと故郷に伝えたからだといえます。

さらに広まりに輪をかけたのが、納豆の研究が進み、血栓を溶かすという「ナットウキナーゼ」の発見をはじめ、ビタミンB群や亜鉛などミネラルの宝庫であることが解明されるにつけ、健康に寄与する食べ物として喧伝されたからではないでしょうか。テレビの健康情報番組のせいで、スーパーの店頭から姿を消してしまうなどという事件もありました。

その意味で、出自は定かではないけれども、糸引き納豆は、その美味さだけでなく、現代科学に指摘されるまでもなく優れた食べ物として日本人が長い経験則から知っていて、今日に伝えている食材の一つであり、かつ朝めしの友としてふさわしいものだったから、今日の定着に至ったのではないか……と思っています。

連載

会いたい人 関 容子



柄本 明^{さん} ②

撮影／タカオカ邦彦

柄本さんが都立王子工業高校の生徒だったころ、ときどき歌舞伎座的一幕見に通ったが、そこでのちに舞台や映画で共演することになる勘三郎（当時勘九郎）さんの芝居を観て、いたく感心したおぼえがあるという。

「勘三郎さんはぼくより七つ年下ですから、そのとき観たのはチビツ子歌舞伎というのか、子役さんばかりの『白浪五人男』勢揃いの場で、勘三郎さんは南郷力丸をやってましたが、ほかの子供より圧倒的に群を抜いてうまくて、とにかくすごいんですよ。口跡がよくて、ピチピチしてて、生命力が溢れ出てて、芝居が好きなんだということがじつによくわかる」

その勘三郎さんが柄本さんを意識するようになった最初の舞台は何だったのだろう。

「自由劇場が六本木のガラス屋の地下で芝居してたとき、太地喜和子さんと一緒に観に来たときでしょう。まだ二十歳そこそこのころだと思えますよ。『マクベス12』という芝居、

演出の串田和美さんに言われて、即興で十分くらいのシーンをコンピで作らされるんです。ぼくは笹野高史と組まれて、即興なら普通、二人で相談するでしょ。でも笹さんとぼくはあんまり仲よくないからね（笑）、相談しない。でも二人がやるとうとう稽古場のときから大爆笑でした。囚人でおかまの恰好した二人が手錠かけられて護送車の中で、お前が悪いとかいやお前が悪いとか、お互いをなじり合うんです。それがなぜ『マクベス12』なのかわかりませんけど。ずっとのちに人伝に聞いた話では、それまでに勘三郎さんが笑いに笑った芝居の三本の中に入る、って言うてくれたそうです。ぼくはあの舞台から、もしかして俳優という仕事をこれからずっと続けていくことになるのかな、とちよつと思いましたね」

しかし柄本さんが自由劇場の舞台に出るに至るまでには、まだ少し間があった。

高校を出ると、経済的理由から大学へは進



劇作家若松了氏の町内劇三部シリーズの「台所の火」に出演する柄本明さん（1983年）

まずに、まずは精密機器を扱う会社に勤める。

「会社勤めを二年間した年の年末に、先輩につれられて例の早稲田小劇場の芝居を観るわけです。早稲田中学の裏にモン・シェリーという喫茶店があつて、その二階の稽古場で観ました。ゴリキーの『どん底』を演出の鈴木忠志さん一流のこわし方で演つていて、たとえば突然演歌みたいな音楽が流れると、役者が歌舞伎の飛六方みたいにドンドンドン、つて出てきたり（笑）、それがおかしくて、やたら笑った。この難解な芝居観て笑つてるのは、ぼくだけだったですね」

私もたまに前衛的な若者芝居を観ると、すぐに笑う観客に置いていかれるみたいなのは、年齢的な問題かと思つたりする。

「いや、それは違うと思います。ぼくはそういう芝居のアナーキーな感じとか、こわされていく感じが面白くて笑つたんでね、若者の無意味な笑いとは違うと思いますよ。演劇というのは能から始まつて、歌舞伎があつて、

：歌舞伎というのは巾が広いですよ。時代物とか世話物とか所作事とか。それから新劇というものに対してアングラが生まれて、またそれに対して小劇場というものができる。そういうテーゼ（主張）に対して反対するアンチテーゼが生まれてくる。それまであったものがこわされるときに、笑えるんじゃないのかな、多分」

なるほど、『マクベス』だの『どん底』だののパロディが笑えるのは、こわされるおかしさだったわけか。

それで柄本さんは、早稲小を観た翌年三月、会社勤めをあつさり辞めてしまふ。

柄本さんの芝居人生第一歩は、金子信雄が主宰する演劇集団「マールイ」からだった。

「たまたま演劇雑誌の『テアトロ』か『新劇』で、マールイが研究生を募集している広告を見て、試験を受けて入りました。でもあそこの演劇活動はテネシー・ウィリアムズの芝居

をやったりはしたけど、あまり活発じゃなかったですね。ぼくの初舞台らしきものは、丹阿彌谷津子さんの朗読の会で、フランスの詩を朗唱しながらちよつと動きをつけたりする……いや、恥ずかしかったです（笑）。だからマールイ当時は先輩の紹介で大道具のアルバイトばかりしてました。歌舞伎座にも行きましたよ。猿之助さんの芝居の大道具とかに。それからNHKにも。大道具は二十四時間、いつでもたいてい仕事がある。夜中に建てこみをして、昼間ばらして、夕方に飾りこむ、とかね。だから会社勤めのときの十倍とか、それ以上の収入になりました。このときも将来自分はこの道かな、と思ったりしたんですが、そのあと自由劇場の大道具のバイトに行つて、串田さんから、稽古場に来てみないか、つて誘われたんですね。ここで出会ったのが、ベンガル、綾田俊樹、岩松了といった、のちのぼくの芝居仲間になる連中でした」

自由劇場には四年間在籍して、結局これも

辞めることになった。

「自由劇場つて、やつぱり都市的でスマートで洗練されてるんですね。それでもつとくだらないものがやりたいと思つて、出たんです。もう少し泥くさい笑いに、あこがれたんですよ」

柄本さんがまず挑戦したのは、新宿西口会館の屋上ビアガーデンのステージ。自分たちで考えたコントを「くだらなく泥くさく」演じる。

「たとえばね、『割箸仮面とスプーンマン』なんて、俺はマントに割箸をいっばいくつつけて、ベンガルはスプーンをやたらぶらさげて、なんでお前は蕎麦をスプーンで食べるんだ、お前こそなんでスイカを箸で食べるんだ、つて、くだらないでしょ（笑）。でもこれ考えてるときはさぞ受けるだろうと思つて楽しんでんだけど、やつたらビアガーデンのお客はだあれも見ないですよ。『黒白動物合戦』では、タヌキとデンデン虫が過激な殴り合い

をして、綾田が頭に怪我したり、命がけでしたけど」

昭和五十一年、ベンガル、綾田俊樹と三人で「東京乾電池」を結成する。

ところで、私が劇団の名前で時代の流れを
実感させられたのが、この「東京乾電池」と
「自転車キンクリート」と「新感線」だった。
「佐藤B作さんは自由劇場の先輩に当るんだ
けど、ぼくが入ったところはもう渋谷の文化村
近くの人形劇団のアトリエみたいな劇場で、
『東京ボードビル』と称してパンパン面白い
ことをやってました。福島なまりで、何言っ
てるのかよくわかんないんだけど（笑）、エ
ネルギーが溢れててすごくおかしくてあこが
れました。それでどうしても上に『東京』と
つけたくて、したら新宿のピアガーデンの
イベントの主催者がふと、『乾電池』って眩
いたんです。語呂がいいからすぐそれに決め
ました」

旗揚げ公演は、浅草木馬館で『花絵巻江戸

のずっこけ』。入場料四百円で「酒付」とあ
るが、入りはよくなかった。

「うまくいかなかったですね。やっぱり甘く
考えてました」

柄本さんが当時衝撃を受けた俳優は佐藤B
作と、もう一人は西田敏行だった。

「あのころ、すごいのを見たな、と思ったの
がB作と西田さんです。そう言えば二人とも
福島出身ですよ。西やんは青年座の研究生の
公演か何かで初めて見たんですか、そしたら
完全に子供の中に大人がいましたね。あつと
思いました。いい意味での人間の欲みたいなの
がギラギラしてて、この人はすぐ上に行く
だろうと思ったら、すぐそうになりましたから
ね」

また、柄本さんが「先生」をつけて呼ぶ三
木のり平への畏敬の念も相当なものらしい。

「今、いろんな笑いがあるけれども、のり平
先生のいわゆる『アチャラカ』の笑いの要素



東京乾電池「店長さんのアックスボンバー」の稽古に励む柄本明さん（1983年）

はなくなりましたね。しかしのり平先生は俳優座の青山杉作門下でちゃんと演劇の勉強をした人だし、晩年は別役美さんの芝居に出て、あんまりせりふはきちんと言わなかったみたいだけど、素晴らしい名演でしたからね。ぼくとの接点は、久世光彦さん演出の連続テレビドラマで、親子の役をやったんです。主演は堺正章さんで、腹違いの弟の役がぼく。のり平先生は因業な金貸し親父で、正章さんとその親父さんとは事ごとに対立する。二人の間をイソップのコーモリのように行ったり来たりするのがぼくなんですけどね。それであるとき、正章一派がこんなこと企ててます、

って言いつけに行く場面があつたんです。テストもやつたんですけど、本番で、ふつとのり平先生を見たときに……止まっちゃったんですよ、怖くなっちゃつて。向うは食事中で、自分だけいい物食つて、そこへぼくが行つて話しかけるんですけど、ぼくを見る目が、どこの誰か知らないけども、いいよ、どつからでもおいで、みたいな感じで、何にもしないんだけど、その貫録というか、余裕というか、格に押されて、それまで自分が食われてたのにまったく気がつかなかったんですよね。すごい人だなあ、と思つてね」

そのころに柄本さんは確かな何かをつかんだのかもしれない。まだ三十代のころだった。

「そのあとでのり平先生が、東京乾電池の芝居を新宿の紀伊国屋ホールへ観に来てくれたんですよ。でも客席見たら、寝てましたね(笑)。でも有難かったです」

昭和五十三年、東京乾電池は『おどろき桃の木漂流記』で渋谷ジャン・ジャンに進出。

それから四年にわたつてここで定期公演を続ける。

「ずつとあとで役所広司さんと『油断大敵』という映画に出たとき、ぼくがベテランの泥棒で、役所さんが若い刑事で、追いかけてっしなながら刑事を育てていく、という面白い映画なんだけど、彼がまだ無名塾の研究生だったころ、渋谷のジャン・ジャンへ通つて観にきてくれてた、つて言うんですよ。あの芝居のあそこはこんなだった、とか、ぼくがもう忘れてるような細かいところまでよく憶えていて、もう会つたその日にすぐ一緒に飲みに行っちゃいましたからね」

東京乾電池は渋谷で次第に名を高めて行く。

「人気が出てきて、お客がバアーツと押し寄せてきだすと、これがまた怖いんですね。一時的にもてはやされてるというか、人気という実体のないものの怖さを、このとき実感しましたからね」

(つづく)

第三十一回

江戸を歩く

下谷から浅草へ



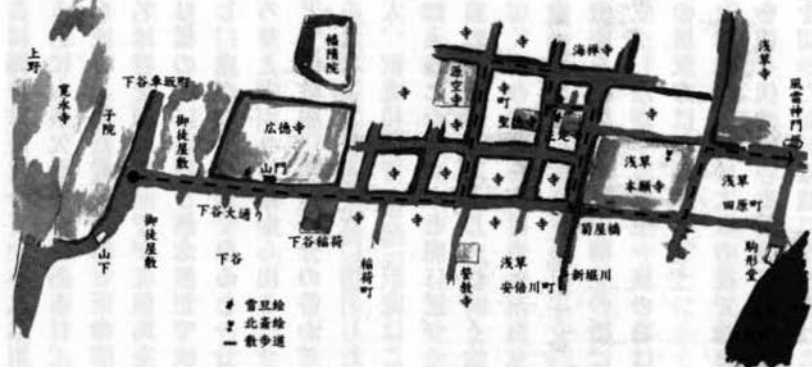
大江戸ウォーカー
森清鑑

下谷、広徳寺

上野寛永寺の東側は北に向かって子院が続いている（上野駅）。そこが山下である。店や催し物で賑わった（上野駅前広場）。子院に沿って北に歩くと下谷車坂町。途中から東に方向を転じる。この下谷大通り（現浅草通り）を真っすぐ行けば大川にぶつかり、そこは浅草である。

山下を右に曲がると左右一帯は御徒組の大縄地。すぐにそれは途絶え、それから浅草に向かって数えきれぬほどの寺町が展開する。まずは、道の左側、御徒屋敷東側に隣接して広大な広徳寺（臨済宗大徳寺派。京都大徳寺は一休和尚や沢庵禅師で有名）がある。江戸時代広徳寺は下谷の名所も名所。寺域内には十二もの塔頭があり、その広さは約一万坪（台東区役所などを含む）。とりわけ江戸っ子が目を見張ったのはその墓域。そこには高さ何メートルもの、驚くほど巨大な石塔が

◆散歩図



林立している。それもその筈、ここは諸大名家の菩提寺。上野の東照大権現（家康）を守るかのように織田、秋月、細川、松平、立花といった各藩大名の巨大な墓石が並んでいる。江戸っ子はこれを見て「おそれ入谷の鬼子母神。びっくり下谷の広徳寺」（太田南畝）といった。下谷は広徳寺の門前町として栄えたといっても良い。広徳寺は、正に江戸を代表する大寺院であった。これら大名の石塔群に混じって、將軍家劍術指南、柳生但馬守宗矩、十兵衛三蔵の墓もある。

柳生但馬守

柳生但馬守は、柳生流を天下に知らしめた劍豪。家光を支えた政治家でもある。海舟はたいした人物と評価している。それは島原の乱のとき、これを治めるべく將軍がただちに派遣した人物を後で知って独断で引き止めようとしたことである。このようなことは余程將軍と密で力を持った者でなければなしえな

い。そこに海舟は着目している（氷川清話）。エピソードにも事欠かない。ある日、家光は酔狂にも虎を入れた檻に入れと下命する。居並ぶ大名は首を竦める。やがて但馬を指名する。彼は檻の中に入ると無念無想で吠える虎に對峙し、虎がおとなしくなると一分の隙もなくそろりと下がり、檻から出る。さすがに但馬守と一同敬服。次は自分の番か。再び首を竦める大名達。家光が次に指名したのは但馬の友人、沢庵和尚である。沢庵はこともなげに檻に入るとつかつかと虎に近づく。虎はまるで猫のように甘え、じゃれつく始末。ややあつてくると背を向けるとぶらりと檻を出る。家光は二人の所作に感動する。後年、但馬は沢庵を招いて奈良、柳生の里に芳徳禪寺を建立。したがって柳生一族の墓は広徳寺と柳生の里双方に在る。

劍豪としての腕前は大坂の役で秀忠に迫った七人を切り伏せている。後にも先にも但馬守が人を切った記録は他にないが、これが真



◆江戸名所図会 整然と塔中、方丈が並ぶ広徳寺全景。門前は川に囲まれ、その下の道が下谷大通り。

実だとすればこれだけで凄いいことである。二代將軍秀忠が身分の低い柳生を江戸の剣術指南としたことには余程のことがあったのではないかと思う。決して表に出ることがない故、「柳生一族の陰謀」など影の物語が創作されているが、どのような描かれ方でも厳格な、知勇兼備な人という点ではぶれがなく、やはり傑物であったのだろう。

長男の十兵衛三厳は、劍聖といわれ、小説、映画、テレビドラマなどであまりにも著名である。実際に強かったのか。柳生十兵衛については江戸期からいろいろ書かれているが弱いという記述が少しもない。やはり、天才的な劍豪であったのだろう。家光の劍指南を務め、諸国修行の後、柳生の里で余生を送り、兵法の代表作「月之抄」を書き残している。

広徳寺門前

広徳寺の山門（表門）は高さが低くどっし

りとしている。これが江戸っ子には寺内の格式とスケールの大きさに比べ、奇異な印象に映った。この門には名工、左甚五郎の彫刻がはめ込まれていたと云うが、とにかく門が有名になった。それで高さが寸足らずの門を揶揄し、「どうしたもんだ広徳寺の門」なる言葉が巷間流行った。文化元年（一八〇一）、広徳寺の、この門前の水茶屋で落語家三笑亭可楽が三題噺を行い、大人気を博した。名人可楽の噺を聴こうと人々が押し寄せたのである（山下、下谷は江戸落語のメッカである。晩年の円朝も広徳寺前の門前町に住んでいた）。その水茶屋の隣にあったのが筆屋。享保年間、美人で店の看板娘「おつた」は筆先をなめて口紅のついた筆で手のひらに字を書いて見せ、これが評判となった。その隣が下谷稲荷。下谷大通りに面しており、江戸庶民に人気のあった稲荷。「広徳寺前の稲荷」として知られていた。稲荷町の語源である。この千貫神輿は有名で今日でも鳥越夜祭りの

千貫神輿と並んでその渡御は見応えある。前出の初代可楽が境内で寄席を開き、「寄席発祥の地」の石碑がある（現在の下谷神社。浅草通りから奥に移転）。広徳寺は、関東大震災後、練馬に寺社を移す。現在の敷地は約二万坪。東京でも有数の広大さを誇る。偉容を誇る大名の石塔も皆移転している（練馬区桜台）。

寺町を縫って歩く

広徳寺の門を出て下谷大通りを東へ、菊屋橋、浅草方面に歩く。この道（浅草通り）の左右には、幅広く寺院が密集している。道に面して左右共に門前町が並ぶ。江戸随一の寺の密集地帯である。道の左側三本目の角を北に転ずる。この道の左右もびっしり寺である。一角を過ぎてさらに行くと左側に浄土宗、源空寺がある。

源空寺は浄土宗の寺院で、開山は道阿霊門（円誉同阿）上人。天正十八年湯島に庵を結

び、家康の婦依篤く湯島聖堂のあるところに寺領を賜り堂宇を寄進される。本尊は法然上人自作の像。上人の御名「源空」をそのまま寺号とした。おおいに栄えるも明暦の大火で焼失。この地に移転してきたのである。源空寺は江戸の有名人が多く眠っていることで知られる。伊能忠敬と師の天文暦学者高橋至時とその子景保、江戸後期を代表する画家、谷文兆など。江戸の俠客幡随院長兵衛の墓もある。

高橋至時は、よしとき学問を追究した至誠の人である。大坂の同心でありながら松岡能一に算学を学び、後に天文学の第一人者、麻田剛立ごうりつに学ぶ。幕府天文方として浅草の天文台で星を観察。経度、緯度の研究、日月食の計算、各種測定器の開発にも意を注ぐ。この知識を、彼を慕って五十才で入門した伊能忠敬に伝授。伊能は至時の指導で緯度一度の観測を始めたことから、精密な日本地図を完成させる。至時は太陽が恒星であることを見抜き、同じ

星が幾百万と天体を構成している事実を指摘している。そして忠敬の測量が無事に終わるように幕府と幾度も掛け合っている。しかし、日本地図の完成を見る前に四十一才の生涯を閉じる。フランス人天文学者、ランデの著作「ランデ暦書」のオランダ語訳の翻訳に取り組み、その過労が彼の命を縮めたとも云われる。独学でオランダ語を学び、数式などから適切な意味を解説している。この時代では希有な数学を非常に重視した学者でもある。しかし、同じ剛立門下の友人、間重富との親密な関係といい、彼がすばらしい人格者であったことは間違いない。忠敬は死の間際、「師の側に葬って欲しい」との遺言を残す。至時の長男、景保も父の後を継いで幕府天文方となり天体観測、測量、問と協同でのランデ暦書の翻訳続行に従事し、伊能忠敬の全国測量を監督、全面援助。忠敬の死後、彼の実測をもとに「大日本沿海輿地全図」を完成させる。しかし、無念なことにシーボルト事

件に関与、文政十二年（一八二九）獄死。したがって日本地図作成は、高橋至時、伊能忠敬、高橋景保、間重富の協力関係によって成されたといえる。高橋親子と伊能は並んで源空寺に瞑っている。

そもそも下谷とは上野の山から見て谷に位置する一帯を指している。太古の昔には上野の山まで波が押し寄せていたに相違ない。つまり、上野の山は半島のように突き出ていたと思われる。広徳寺から始まり、浅草へと続く道（浅草通り）を挟んで南北一帯に寺が密集しているが、その光景は、塀に囲まれた個々の寺が並んでいるのではなく、全体が美しい自然の景観を成している。しかも、寺群ごとに道と小川が自然の区画をなし、各区画内に門前町があり、寺、住民、木々の自然が一带となった姿を見る。それは、この地の殺風景な現代のビル群からは想像もつかぬ、美しい光景である。長谷川雪旦は、下谷から浅草に抜ける、寺町の光景を、寺群ごとに何頁

にも渡って描写している。そのひとつが八寺社を眺望した図である。

源空寺の北側に面する道を東へ歩くと左に海禅寺。ここも広い。そこから真つ直ぐ南に降りると聖徳寺がある。これも浄土宗の寺。ここには江戸の水の恩人玉川兄弟が眠っている。四代家綱の時代になると、神田上水だけでは膨れあがった江戸庶民の水を賄いきれなくなった。そこで多摩羽村から四谷の大木戸まで全長四十八キロに渡る水路を完成させたのが玉川兄弟である。彼らは、江戸市民にとっては、いわば命の水の神様。本名は加藤庄右衛門と清右衛門。大変な難工事で、一年四ヶ月もかかり、一六五四年に完成。幾度も失敗し、事故も多発する。山あり谷ありの地形を縫って四十八キロの微妙な傾斜路を実現した彼らに敬意を表する。それだけではない。幕命により工事費として七千五百両が下賜されたものの、資金が不足し、二人は二千両もの私財を投入したという。幕府はこの功労を

讃え、その名を玉川上水とし、彼らに玉川の姓を贈った。実にえらい人もいたものである。墓は都の指定旧跡。

正徳寺門前左の道を東に行き、二角目を南へ。すると右手に浄土宗、正定寺しょうていじの門が見える。ここには勝海舟の剣術の師、島田虎之助の墓がある。若き鱗太郎に剣術を教え、そればかりか禅を修行させ、西洋学問へ目を向けさせたのも虎之助である。鱗太郎は、歳はずっと上だが従兄弟に当たる、江戸随一の剣客、男谷精一郎の門を叩く。そして紹介されたのが愛弟子の島田虎之助である。その剣技は恐るべきもの。幕末の江戸で並ぶ者無し。男谷に次ぐ剣客といわれたが惜しむらくは三十九才で病没した。墓碑には、師、男谷精一郎が記した



◆江戸名所図会 下谷から浅草へ、寺群の図。中央上、海禅寺。左下、聖徳寺。

「余、哀歎ほとんど一臂^{いっぴ}を失うごとし」が刻まれている。精一郎の嘆きは、いかほどのものであったか。

正定寺門前を入谷田圃から流れてくる川が新堀川である。この川はさらに南に下り、鳥越橋から御蔵を巻いて大川に注ぐ。この川を渡ると右手一帯が浅草本願寺（浄土真宗）。

敷地一万五千坪。敷地内に二十一の子院と三十五の塔頭。広大な敷地の西面に新堀川が流れ、南は上野から来る江戸の主道路に面している（現浅草通り。すなわち広徳寺前から浅草に行く道）。北側は誓願寺を含む、浅草北寺町。東面は浅草田原町の家並みである。その本堂大伽藍から富士を望んだ景色が北斎の富嶽三十六景「東都浅草本願寺」。すばらしい構図である。この絵は、ここからも富士が眺められたことを物語っている。

本願寺の南を真っ直ぐ行けば大川の駒形堂に出る。多くの江戸っ子は上野、下谷からこの本願寺南東角に沿って北に上がり、本願寺

領域が切れたところから右に転じ、浅草広小路、風雷神門そして大川に架かる吾妻橋に行く道を歩いた。この道（雷門通り）の北側一帯が金竜山浅草寺である。現代の道幅は広くなっているがその位置は基本的に江戸期と変わらない。

【参考文献】

- 「江戸史跡事典」下巻（新人物往来社）
- 「東京路上細見」酒井不二雄著（平凡社）
- 「江戸名所図会」（角川書店）
- 「江戸明治東京重なる地図」中川恵司編（エービーピーカンパニー）
- 「北斎・広重の富嶽三十六景筆くらべ」（人文社）
- その他



◆北斎 富嶽三十六景「東都浅草本願寺」

浄土誌上句会

●池

〔特選〕

利尻富士映して澄める池の水

工藤 浄真

北海道の西海岸を北上すると、左手に利尻富士の島が見えてくる。その山を映すという、島内の池なのか、三十キロ近く離れた本土なのか。分からぬながら池に投影された円錐形が、鮮やかに頭に浮かんでくる。

〔佳作〕

秋天を映して迦毘羅池静か

鳥羽 梓

水を飲む猫に池面の月揺るる

増田 美登

池の面の波紋は細し水すまし

西井 正

●待つ

〔特選〕

終列車待つひとときの銀河かな

河井富美枝

終車を待つてホームに立つと、銀河が頭上をまたいで横たわっている。と、これは空気の澄んだ所で、大方はかすかに、しかも切れ

端しか見えなくなってしまった。作者にはどのような姿を見せているのだろうか。

〈佳作〉

待つ人のありて急ぎぬ萩の道

中島富士子

信号を待つひとときの日陰かな

山口 信子

待合室マスクの妻に眼で合図

石原 新

●自由題

〈特選〉

自転車に屋号の二文字島残暑

池田 伊吹

島の古老の間では、いまだに屋号で呼び合うことがある。漁舟には屋号に丸をつけて書く。あれもこれと同じように、自転車にも多分ペンキで屋号が書いてあるのだ。屋号はまだまだ幅を利かしているのである。

〈佳作〉

二百十日小寒き雨の一日過ぐ

佐藤 雅子

葱植える老いし夫婦に秋の風

小林 恵美

法衣脱ぐ無患子青き寺の庭

野村多加子



誌上句会 〈編集部選〉

■池

風来ては紅葉散らして心字池
蓮枯れて池渡る風行方見ず
暮れなすむ池に鎮もる蟬の声
水澄んで動き鈍かり池の鯉
池の面に尾をちよんちよんと鬼蜻蛉
蓮池に近づきて土やわらかし
池に浮く思惟と芥と鱗雲
秋雲映す池一枚あればよし
大池も小池も同じ月うつす

金谷友江
中島富士子
河合富美枝
佐藤雅子
鈴木英子
宮崎 掉
小林苑を
濱野具円
村松芳郎

■自由題

■待つ
天高しお地蔵様は子等を待つ
病む人の待ち望みたる良夜かな
待つ鮭の迷に大物うなるなり
一呼吸遅る夫待つ鱸雲
待つ人の影長くなり秋あかね
コスモスや手を振り待てる人のいて
向日葵の待ちくたびれし母屋かな
白日傘待つごとくあり参拝所
待避所を出づれば坂や秋の昼

金谷友江
佐藤雅子
工藤浄真
鈴木英子
小林暢夫
鈴木真理子
宮崎 掉
山内桃児
篠 浩美

浄土誌上句会のお知らせ

兼題
季節ではありません

逆引き自由題

締切・二〇〇九年十一月二十日
発表・『浄土』二〇一〇年一月号
選者・増田河郎子（「南風」主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

風白し俳句随想届きけり
頂上は岩一枚の萩の風
秋深し介護寮建つ街はづれ
枯葉踏むしかと微かな老の音
霧はれて池塘輝き見せにけり
残暑とは黒き大きなオートバイ
魍魎が底へ移る秋暑かな
鶏頭の紅網膜に留まれり
達筆の手紙の中の鳳仙花

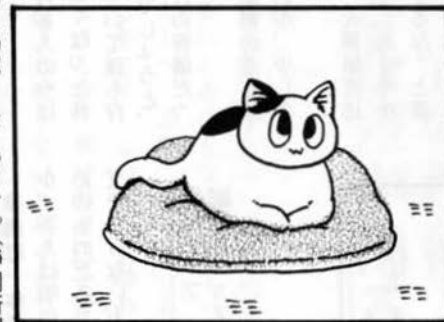
金谷友江
河合富美枝
中島富士子
工藤浄真
鈴木英子
宮崎 掉
山内桃児
小林暢夫
笠井亜子

さっちゃんね

かまちよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



振り向けば風の無き日に紅葉散る 岱潤

先日中国人の方の葬儀を行った。亡くなった方は九十歳のおばあさん。三十七歳で夫を事故で失い、その後再婚した夫も数年前先だっている。先夫の間に一男一女、その長男も二年前に逝き、後夫との間に二女がある。後夫が逝ったあと先夫との間の長女が主にこのおばあさんの世話をしていたそうだが、とても元気でわがままほうだったと笑う。今回も長女が葬儀の一切を仕切っていた。「わがまままで最後まで苦労をかけた人だけど、親には変わりない。立派な葬儀を出してあげたい」と、一〇〇人を超える参

列者があった。

片や数日前聞いた話で、日本人のやはり九〇歳のおばあさんが亡くなった葬儀。二〇年近く病院に入っていて誰も存在すら気が付いてなかったでしうと、親戚も呼ばない一家三人だけの葬儀だったという。

中国人と日本人、そこに儒教の差を感じる必要もないかもしれないが、少しさみしい気持ちになった。

最近葬儀すら行わない、火葬場直送が増えていると聞く。遺言で「お金をかけるな、誰も呼ぶな、何もするな」と書く人が多く、その遺言を守るべきでしうかという電話相談を受けたこともある。

雑誌「浄土」
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・順行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

葬儀は一体誰のためにするものなのか。答えは明白だ。ほとんどが遺族のためのものであろう。死に逝く人はそれに注文をつけない方がいい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十五巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

発行

平成二十一年十月二十日
平成二十一年十一月一日

発行人

佐藤良純
大室了皓

編集人

印刷所

株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一

発行所

法然上人鑽仰会

電話

FAX

振替

〇〇一八〇・八・八二八七

〇三三・五七八・六九四七

〇三三・五七八・七〇三六

〇一八〇・八・八二八七

随器開導ずいきかいどう

器に随いて開導す
無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

助言、指導、介護は、担当者の性格、立場、方法によつて、効果に大きな差が出る。

「木もと竹うら」と言う諺があります。木を割るときには根もとから、竹を割るときは先端の方から、刃物を入れると、きれいに割れると言う意味ですが、諺のポイントは物の使い方に熟知すべしと思われまふ。

大麻、コカイン、モルヒネは、多幸感、開放感の幻覚や興奮を引き起こす薬物であると同時に麻

酔になくってはならない医薬品です。使用方法一つで、薬にも毒にもなるのです。

スポーツ、芸事、修行に、ある程度の身体の酷使は必要です。この身体的締めつけを単に生理的痛みとみるか、精神的連携を考えて、高いレベルを目指す方便と受けとめるかで、プラスにもマイナスにもなつてしまします。

法然上人鑽仰会の

本

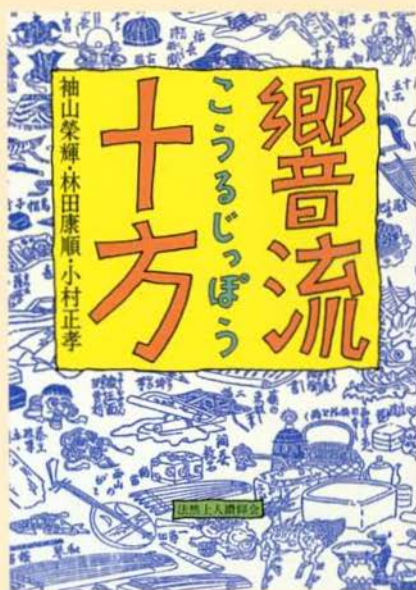
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

巾額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠一巻本』より